

「人体パズル」

槌谷
健

登場人物

朝比奈文香（14・28） 新聞記者

畑中学（29） 工業新聞記者

三好誠也（25） オカルト雑誌記者

萩原美代（享年14） 文香の元同級生

豊島吾郎（55） オカルト雑誌編集長

西村和孝（50） 文香の上司

田所麻衣（28） 文香の記者仲間

駅員

生徒A

男A、B

女A

主婦A

リポーター

○陸橋・全体（深夜）

都市郊外にある鉄道にかかる陸橋。
あたりは静まり返っている。
と、付近にある踏切が鳴り始める。

○同・上（深夜）

鳴っている踏切の音。
手すりをよじ登る人影。

○同・全体（深夜）

特急電車が近づいてくる。

○同・上（深夜）

欄干に登り、下を覗いている人影。
特急電車が近づいてくる。
人影、線路に飛び込む。
激しい衝撃音とブレーキの音が鳴り、
やがて静寂になる。
人影がよじ登った壁に残された足跡。
その足跡が変形し、QRコードになる。

○タイトル

T 人体パズル

○駅舎・全景（朝）

陸橋の近くにある駅舎。

駅員の声「バラバラでしたよ」

○同・内（朝）

朝比奈文香（28）が、メモを取りながら駅員に取材をしている。

駅員「正面からまともにぶつかったみたいで、残念ですが即死でしたね」

メモを取る文香。

文香「何か変わったことは？」

駅員「さあ、他に人もいなかったし、自分の意志でよじ登らない限り、陸橋から落ちることはないからねえ」

文香「うーん……じゃ、ただの自殺ですね」

はいおしまい、といった感じでパタンとノートを閉じる文香。

駅員「（文香の態度に少し怪訝な顔をして）

まあ、そうだと思います」

文香、ノートを鞆にしまいつつ、

文香「この後ひき逃げの取材が入っちゃった
んですよ。なので今日はこの辺で。どう
もありがとうございます」

駅員「はあ」

文香、鞆を肩にかけ、さっと出ていく。

○陸橋・上（朝）

文香、電話をしながら歩いている。

文香「久しぶり。急にどうしたの？ うんう

ん。記者仲間のコンパ？ いつ？ 今

日！？ あっいやいや大丈夫。絶対行く。

なんとかするから。はい。じゃあね」

電話を切る文香。

女の声「（小さくか細い声で）ねえ」

文香「え？」

辺りを見回す文香。だが変わった様子
はない。

文香、おもむろに欄干を見て、

文香「そっか。ここ、昨日の……」

文香、欄干を登り、上半身を乗り出して下を見る。

眼下の線路に特に変わった様子はない。

女の声「へさきほどより近いところでねえ」

文香、ビクツとして、欄干から降りる。

再び辺りを見回す文香、何かを見つけ、

文香「ん？」

文香、壁にQRコードが印字されているのに気づく。

文香「何これ……QRコード？」

文香、手にしたスマホでQRコードの写真を撮り、さらにQRコードをスマホで読み込む。

アクセス中と表示される画面。

と、スマホが鳴り、アクセスが中断される。画面には『本社・社会部』からの着信表示。

電話に出る文香。

文香「もしもし、朝比奈です。お疲れ様です。

はい。え？ 今すぐ戻るんですか？」

電話をしている文香の横の壁、QRコ

ードが消えて無くなっている。

○大日本新聞社・外観

都心に立つ大きなビルディング。

プレートに『大日本新聞』の社名。

○同・社内

大きな事務フロア。

社会部の部長席に座る西村和孝（50）

と、その前に立って対峙している文香。

西村「残念だけどそういうわけで……」

文香「そういうわけってどういうわけです

か！？ 明日から出向だなんて！！」

西村に詰め寄る文香。

西村、面倒くさそうに、

西村「出向ったって向かいのビルなんだから

いいだろ。引っ越す必要もないし」

西村、顎で窓の外を指す。

○同・窓外

道路を挟んで向かいにボロい雑居ビルが建っている。そのビルの年季の入ったプレートに『樹海書房』とある。

○同・社内

西村に対峙している文香。

文香「向かいだったって出向は出向です！ あんなオカルトまがいの出版社なんて……」

西村「オカルトまがいじゃなくて、オカルト

専門誌だよ。樹海書房は」

文香「よけいにイヤです」

西村「君のステップアップのためなんだからさ。ほら、霊界と交信できるようになったら、死亡事故の取材とか楽になるだろ」

文香「……誤報のせいですか？」

西村「え？」

文香「この前の記事で誤報を出したからです

か？ そりゃたしかにあれは……」

西村、遮るように、

西村「それと出向とは直接関係ない」

文香「じゃあ間接的には関係あるんですね」

西村「……知らん。上が決めたことだ」

西村、席を立って去っていく。

文香、恨めしそうに西村の背中を睨む。

○居酒屋（夜）

大きめの座敷で飲み会が行われている。

一角のテーブルで文香、畑中学（2

9）、田所麻衣（28）が座っている。

文香、かなり酒に酔っている様子で、

文香「ていうか警察の発表通りに記事書くだ

けなら新聞記者なんていらないでしょ！」

麻衣「文香は余計なことに首突っ込みすぎる

のよ。正義感が強いというか、自己主張

が強いというか」

文香「正義と自己中を一緒にしないでよね」

文香、手元のグラスを飲み干す。

文香の隣の席で、文香の様子を窺って
いた畑中、ビール瓶を持って文香に、

畑中「（おどおどとした感じで）あ、あの、
つぎましようか」

文香「（誰かいたの？という感じで）え？
ああ」

文香のグラスにビールをつぐ畑中。

文香「ええつと、あなた誰だっけ？」

畑中「日々工業新聞の畑中です……って、一
応さつきも一度自己紹介したんですが」

文香「そう？ まあいいや。よろしくー！」

文香、畑中の髪の毛をかき回す。

麻衣「やめなよ、文香。飲み過ぎじゃない」

文香「だって飲まなきゃやってられないっし
よ。ほら、君もどんどん飲んで」

文香、畑中に飲ませる。

文香、むせる畑中をじっと見て、

畑中「な、なんですか？」

文香「君オタク？」

畑中「え？」

文香「なんか雰囲気オタクっぽいよね。美少

女ファイギアとか並べてそうであ

赤面する畑中。

麻衣「だからやめな

文香、畑中を見てバカ笑いしている。

○中学校の廊下（文香の夢）

掲示板に貼られた校内新聞の前にたく

さんの生徒が集まり、それを見ている。

その横を通りかかる文香（14）。

人だかりの中にいた生徒A、文香に、

生徒A「あつ、朝比奈さん。この記事、朝比

奈さんが書いたの？」

文香「（自信気に）うん、そうだけど

生徒A「すごい！大スクープだね」

文香「そうかな」

生徒A「この記事のこともっと教えてよ」

生徒A、文香の手を引き、人混みをか

き分け文香を新聞の前まで連れて行く。

文香、壁に貼られた新聞を見上げると、

『朝比奈文香 飛び込み自殺』の文字
と現在の文香の写真が載っている。

文香「えっ！？」

文香、思わず生徒Aの顔を見る……が、
生徒Aの首から上がいつの間にか無い。

文香「！！」

（文香の夢終わり）

○畑中の部屋・内（朝）

マンションの一室。

ベッドで寝ていた文香、汗びっしり
になって目を覚ます。

文香「……夢か」

文香、体を起こし、辺りを見回す。

綺麗に整頓された部屋。パソコンや3
Dプリンターなどが並び、コルクボ―
ドにはデザイン画が貼ってある。

文香「……どこ？　ここ」

文香、立ち上がり際に頭を押さえ、

文香「痛たた。あー飲みすぎた……ん？」

文香、テーブルの上に部屋のスペアキ
ーと置手紙が置いてあることに気づく。
手紙を手に取り読む文香。

文香「おはようございます。タクシーでお送
りしようとしたのですが、泥酔されてい
たので住所が分からず、自宅で保護しま
した……私は野良犬か」

文香、手紙の終わりに『畑中』と書か
れているのを見て、

文香「……誰だっけ？」

文香、ふと目の前の棚を見上げると、
美少女フィギアが並んでいる。

文香「あっ、オタク君か」

文香、フィギアを手に取って眺める。

文香「やっぱりオタクじゃん」

と、文香、ふと時計を見る。

時刻は8時半過ぎ。

文香「遅刻——！」

文香、スペアキーを取り、慌てて部屋
を飛び出していく。

○樹海書房オフィス

壁時計が9時半を少しまわっている。

ドアがバンと開き、文香が入ってくる。

文香「（頭を下げて）申し訳ございません！

初日から遅刻してしまいました…：…ん？」

文香、頭を上げて辺りを見回す。

他には誰もいない。

文香「おつかしいなあ…：…休み？」

文香、近くの新聞紙が散乱しているソ

ファに腰を下ろす。

三好の声「ウゲッ！」

文香が座った下から三好の音がする。

文香「キヤアッ！」

文香、驚いて思わず立ち上がる。

三好「（あくびをしながら）なんすか。こん

な朝早くっから…：…」

新聞紙を布団代わりに寝ていた三好誠

也（25）が体を起こす。

三好、茶髪でだらしない風貌である。

文香「え？ あ、ごめんなさい」

文香、襟元を整えて、

文香「本日付けで大日本新聞から出向してき
ました朝比奈文香です。どうぞよろしく」

きりつとした顔であいさつする文香。

三好「……すんません。自分、年上興味ない
んで」

三好、あくびをして再び横になる。

文香「（小声で）クツ、こいつ……」

ソファに軽く蹴りを入れる文香。

と、豊島吾郎（55）が入ってくる。

豊島「あ、いたいた」

豊島、文香の元へやってきて、

豊島「朝比奈さんだね。豊島です。よろしく」

三好「あれ？ 編集長。今日は早いっすね」

文香「え？ 編集長？」

豊島「朝比奈さんに勤務時間を伝えるの忘れ
ててね。で、来てみたら案の定。でも三

好君がいたんなら来なくてもよかったね」

三好「（あくびをしながら）もっと早く来て
くれてたら睡眠の妨害されなかったのに」

文香「あの、勤務時間ってというのは？」

豊島「ああ。基本みんな昼出勤でね」

豊島、編集長席に移動し座る。

豊島「ほら、うちオカルト専門でしょ。幽霊

とかUFOとかみんな夜がメインだから」

文香「はあ……」

豊島「幽霊って言ってもピンとこない？」

文香「……あの、私、正直言って全く信じて

ません」

豊島「ほう」

文香「（早口で）まず目で見えないですし、

気配すら感じたことないですし。あと、

スピリチュアルとかパワースポットとか

も大嫌いです。最近多いんですよええ。

なんかちよっと上手くないことがあ

ったら、すぐにそういうこと言い出す人。

全部自分の努力不足だったのに」

文香、堰を切ったように話し出す。

文香「とまあそういうふうには考えていま
すので。でも仕事は仕事。割り切ってい

ますから。幽霊でも人面犬でも、取材に行けと言われればいきますよ。もちろん」

豊島「……すばらしい」

文香「え？」

豊島「いやいや。靈感が強い人なんかだと、すぐやめちゃったりするんでね。でも君なら大丈夫そうだ」

文香「それはよかったです」

豊島「じゃあ早速だけど、こいつを調べて記事にしてくれないか」

豊島、文香に資料を渡す。

資料はインターネット掲示板のコピー。

「死のQRコード」などの言葉が並ぶ。

豊島「おい、三好君」

三好「また俺？ まだ寝てるのに」

三好、しぶしぶ起き出してくる。

豊島「彼女まだ勝手がわからないだろうから、今回の仕事は君と二人でやってほしいんだ。いろいろと教えてやってくれ」

三好「（眠そうに）はあい」

豊島「じゃあ、ちよつと銀行行ってきまーす」

豊島、立ち上がりドアを開け出て行く。

三好「またパチンコだな」

文香「え？」

三好「いや。まあとりあえず座ってください」

三好と文香、空いているデスクに座る。

三好「あまりバカにしないほうがいいですよ」

文香「え？」

三好「幽霊なんかって気持ちはわかりますけ

どね。でも、原因不明の病気とか失踪と

かで来なくなる人けっこう多いんです」

文香「まさか」

三好「そのデスクの前の主もそのひとりだね。

試しに下の引出し、開けてもらえますか？」

文香「なんで？」

三好「開けてみればわかりますよ」

文香、恐る恐る引出しを開ける。

と、大きな音とともにバネのついたお

化けのおもちやが飛び出す。

文香「きゃあ！！」

三好、爆笑している。

文香「最低っ」

三好「まあまあ。でもこれでちよつとは慎重になるでしょ」

文香「ならないわよ！」

三好「そうかな」

文香「とにかく私は失踪なんてしないし、こんな出向さっさと終わらせますから」

三好「じゃあまず初仕事してもらわないと。」

資料の概要はわかりましたか」

文香「目は通したわよ。くだらない話に」

三好「そんなことないと思うけどなあ」

三好、文香の資料を手に取り読む。

○廃病院（資料のイメージ）

三好の声「男友達と連れ立って、幽霊が出るということまで有名な廃墟に肝試しに行きました。ほんの軽い気持ちで」

廃墟の病院内を若者たち三人が懐中電灯片手に雑談をしながら歩いている。

男 A 「もう出口みたいだ」

女 A 「なんにもなかったね」

男 B 「もうちよつとスリルあるの期待してた
んだけどねなあ」

と、近くの壁が崩れる。

女 A 「な、何！？」

恐る恐る様子を伺う男 A。

男 A 「……大丈夫。壁が傷んでただけみたい」

男 B 「けっ、ビビらせやがって。ボロ病院」

女 A 「あれ？ ちよつと待って。何これ？」

女 A 、崩れた壁の辺りを灯りで照らす。

壁に QR コードが印字されている。

男 A 「なんでこんなところに」

男 B 「霊界からのメッセージじゃないの」

男 B 、スマホで QR コードを読み込む。

女 A 「気持ち悪い。やめなよ」

男 B 「平気、平気」

画面の URL に接続する男 B。

三人、男 B のスマホを覗き込む。

と、突然、血走ってカッと見開いた目

がスマホの画面に現れる。

悲鳴を上げる三人、スマホを放り出して走り去る。

三好の声「あの出来事は一体なんだったんでしようか。そこにいた霊が、私たちに何か訴えたかったのでしょうか。結局その携帯電話の持ち主は、翌日に携帯電話を回収しに行くといってもう一度現場へ行ったきり行方不明になってしまいました」

（資料のイメージ終わり）

○樹海書房オフィス

資料を読み上げている三好。

聞いている文香。

三好「どうですか。いい話でしょ」

文香「どこが。バカバカしい」

三好「よくできた怪談じゃないですか」

文香「あんたたち、こんな裏付けのない都市

伝説を記事にして給料もらってるわけ？」

三好「はい。科学的に証明されちゃうと怖く

ないですから」

文香「（あきれたように）あっそう」

三好「他にも派生したバージョンがありますけど、共通しているのはふたつ。いわゆるつきの場所にQRコードが突然現れるってことと、それを読み込んだ人が死ぬか失踪するってことですね」

文香「QRコードが突然ねえ……あっ」

思い出す文香。

三好「どうかしましたか？」

文香、自分のスマホを取り出して、

文香「昨日バタバタしてたからすっかり忘れてた。これ見てよ、この写真！」

文香、スマホの画面を三好に見せる。

三好「……この写真が何か？」

文香「にぶいわねえ。死のQRコードよ。しかも飛び込み自殺があった翌朝の現場よ」

三好「……壁のシミにしか見えませんが」

三好、文香にスマホを見せる。

そこには昨日文香が撮影した壁が写っ

ているが、QRコードは消えている。

文香「そんなはずは……」

三好「目に見えないものは信じないって言うてましたよね」

文香「……証拠ならあるわよ。ちゃんと読み込んだんだから……あった！ これこれ」

文香、URL接続記録を三好に見せる。

文香「これ接続しようとして中断したままだったの。あの最悪な呼び出しのせいで」

URLに接続しようとする文香。

三好「ちよ、ちよっと待って」

文香「何よ」

三好「さっきの話聞いてなかったんですか。死にますよ」

文香「あんなのただの噂でしょうが。真相を暴くのがジャーナリズムよ」

文香、かまわず接続する。

三好「あーあ」

スマホの画面に注目する文香と三好。画面は真っ暗なまま。

息を飲む文香と三好。

と、画面にファイルダウンロードの表示が出て、ダウンロードが開始される。

文香「何これ？」

三好「ウイルスとかじゃ……」

文香「げっ！ ちょっとどうにかして！」

文香、電源を切ろうとするが慌てているため操作がおぼつかない。

ダウンロード終了の文字が出る。

文香「……どうしよう」

三好「まあ、まだウイルスと決まったわけじゃないですから。ちょっと借ります」

三好、文香のスマホの画面を見ながら、自分のパソコンで調べ始める。

文香、暇つぶしに、鞆をあさる。

文香「あっ」

文香の鞆の中、美少女フィギアとスペアキーが入っている。

文香、なんとなくフィギアを机に置く。

三好、パソコン画面を見ながら、

三好「さっきダウンロードしたファイル、3

Dプリンター用のデータみたいですね。

拡張子を調べると……なんすかそれ？」

三好、文香の机のフィギアに気づく。

文香「え？ ああ、ごめんごめん。これはち

よっと借り物。で、なんのデータって？」

三好「3Dプリンターのです」

文香「ふーん、で、あるの？ ここに」

三好「ないですよ。出版社なんですから」

文香「じゃあどこ行きやあるのよ」

三好「まあ一般用なら、そのフィギア作った

りするようなどころならありそうですが」

文香「……おお。グッジョブ、オタク」

三好「はい？」

文香「さっそく外回り行くわよ」

フィギアを取り、立ち上がる文香。

○畑中の部屋・玄関外（夕）

待ちくたびれている文香と三好。

畑中が歩いてくる。

畑中「あっ」

文香と三好も畑中に気づき、

文香「あっ、昨日はどうも」

気まずそうに頭を下げる文香。

畑中「いや、こっちこそ」

文香「昨晚はほんとごめんなさい」

畑中「いやいや。体大丈夫ですか？」

文香「あ、ええ。なんとも」

畑中「よかった。かなりハイになってたから」

苦笑いする文香。

畑中「鍵あったでしょ。中で待っていてくれて

もよかったのに」

文香「いやさすがにそれは。ちょっと別件で

お願いごともあって来たので」

畑中「そうですか。ま、どうぞ入って」

畑中、玄関を開け、先に入っていく。

三好、文香に、

三好「（ぼそっと）訳ありませんね」

文香「バカ」

文香と三好も中に入る。

○同・内（夕）

座って「死のQRコード」の資料を読んでいる畑中。

畑中と対面に座っている文香と三好。

文香「……とまあそういうわけで」

畑中「んー……」

文香「そりや信じられないってのはもったも

なんだけど」

畑中「いや、興味深い話ですよ」

畑中、資料をテーブルに置き、

畑中「それでそのデータってのは？」

文香「あ、これです」

文香、スマホを畑中に渡す。

畑中「これ、パソコンに接続してもいいかな」

文香「ええ。どうぞ」

畑中、作業用デスクに移り、スマホを

ケーブルでパソコンに接続する。

文香「出力できそう？」

畑中「少し時間ください」

文香「でもすごいですね。自宅に3Dプリン

ターがあるなんて」

畑中「工業新聞の記者の傍ら、デザイナーの勉強もしてるんです。ほんとは工業デザイナーになりたいんですよ」

文香「へえ。それで」

パソコンで作業を続ける畑中。

三好「ま、でも、俺は出力しないほうがいいと思いますけどね」

文香「なんで？ 祟られるから？」

三好「それもですけど。それより、何も無かつたとき困るでしょ。想像で記事にしちゃうほうが盛り上がると思うけどなあ」

文香「ジャーナリストとしてあるまじき発言」

畑中「ははは。どっちも一理ありますね。で、

どうしますか？ 準備は出きましたよ」

文香「もちろん出力開始で」

三好「ま、祟られるのは文香さんですから」

三好をにらむ文香。

畑中「じゃあ、開始で」

エンターキーを押す畑中。

3Dプリンターが動き出し、白い樹脂が成形されていく。

文香「なにが出るかな」

と、3Dプリンターが止まる。

文香「あれ？ 中断？」

畑中「いや、終わりです」

3Dプリンターには野球ボールほどの

白い塊が乗っている。

三好「やっぱりね」

白い塊を手に取り、まじまじ見る文香。

畑中「なにかのイタズラか、バグの一種かな」

文香「今のところ、そう考えるしかないか」

肩を落とす文香。

畑中「今後またなにかあれば協力しますよ」

文香「ありがとう」

畑中「そうだ。もう使っていないのが一台あ

るから、貸しましょうか」

文香「え？ いいの？」

畑中「はい。マニュアル通りやれば出力くら

いはできますから。でも重いですよ」

文香「大丈夫！ 二人で運ぶから！ ね」

三好「はあ！？」

面倒くさそうに文香を見る三好。

○文香の部屋（夜）

マンションの一室。

汗だくの三好が3Dプリンターを置く。

三好「あー重たかった」

三好、ふと横を見る。

飼い猫キララにエサをやっている文香。

文香「昨日はごめんね。留守にして」

三好「ちつとは手伝ってくださいよ」

文香「おお、さすが男子。ご苦労」

三好「はあ。じゃあ帰ります」

出て行こうとする三好。

三好「あつ、そうそう何かあったらいつでも

電話してくださいよ」

文香「何かあって？」

三好「崇りですよ、崇り」

文香「え？ 本気で言ってるの？」

三好、無言のままおもむろに上着を脱ぎ出す。

文香「ちよ、ちよっと待った、待った！」

上半身裸になる三好、背中を文香に見せる。

文香「え……」

三好の両肩、人に思いつきり掴まれたような手形が痣となって残っている。

三好「……もういいですかね」

三好、再び上着を着る。

三好「俺もね。全く信じていませんでしたよ。今の仕事するまで。でも一度だけほんとにヤバいことになったんです」

文香「まさか……」

三好「俺もまさかでしたよ、最初は。有名な心霊スポットで初めてヤバいもの見て、気絶しました。後のことは覚えてません。翌日霊媒師に除霊してもらいましたけど、これは残ったままです」

文香「そうなんだ……」

三好「別に怖がらせようってわけじゃないですよ。実際、それ以外は心霊体験なんてしてませんし。たいていはただの噂話にすぎないです。でも、万が一のこと想定してください。お願いします」

文香「うん、わかった」

三好、いつもの調子に戻って、

三好「ま、文香さんなら、幽霊のほう逃げていくかもしれないですけど。じゃあ」

文香「ははは。じゃあね」

部屋を出ていく三好。

残された文香、おもむろに机に置かれた白い塊を見つめる。

キララがやってきて塊で遊び始める。

文香「ま、大丈夫よ。さっ、オフモードっ」

文香、ソファに座りテレビをつける。

塊を噛んだりして遊んでいるキララ。

○文香のマンション・外観（夜）

夜が更けていく。

○とある街角

女子高生らに取材をしている文香。

○とある交差点

道端に花束が供えてある。

花束の付近を調べている文香。

○樹海書房オフィス（夕）

三好らがデスクワークをしている。

入り口から文香が疲れて入ってくる。

自席に着く文香、ぐったりしながら、

文香「本日の成果無し」

三好「ネットサーフィンしてた方がよかったですね」

文香「私はこう見えても足で稼ぐほうなの」

三好「そうですか。俺はキーボードで稼ぐほうなんで。見てください、これ」

三好のパソコン画面を見る文香。

パソコンにはホラー系の掲示板。『人体パズル』というタイトルがある。

文香「人体パズル？」

三好「3Dプリンターに関する唯一のホラー系の書き込みがこれでした」

文香、掲示板の書き込みを読む。

文香「ある日メールで謎のファイルが送られてきた。それは3Dプリンター用のデータだった。なんだろうと思って出力してみると、出てきたものは謎の塊……」

三好「どこかで見ましたね」

文香「一緒にしないでよ」

三好「まあまあ。問題はその後です」

文香、続きを読む。

文香「……その日から、身に覚えのないものが勝手に出力されていくようになった。初めはただの塊だと思っていたものが、よくよく見ると、パズルのように組み合わせることができることに気づいた。そしてその完成形が人体だと判明するのに時間はかからなかった……」

三好「そして完成した塊が実体化して……」

文香「謎の死か失踪でしょ。バカバカしい」

三好「あっ、またバカにした」

文香「バカにしたんじゃないやなくて論理的な反論

よ。だってそうでしょ。普通、メールで

送られてきた怪しいファイル開く？ そ

して偶然自宅に3Dプリンターがある？」

三好「まあそう言われればそうですけど……」

文香「でもま、いい気分にはならない話だわ」

文香、画面の書き込みを見つめる。

○文香の部屋（夜）

文香が入ってくる。

文香「ふう。疲れた」

キララ、文香の元に来るが、ぐるぐる

とその辺を周り、落ち着かない様子。

文香「キララどうしたの？ ……ん？」

文香、3Dプリンターの出力箇所の上

に白い塊が乗っているのに気づく。

文香、塊を手に取りキララに、

文香「あんたが置いたの？」

キララ、その塊を嫌がるように去っていく。

文香「何？ 昨日はあんなに遊んでたのに」

と、突然パソコンが勝手に起動する。

文香「え？ どういうこと？」

文香、パソコンのキーボードを無作為に叩くが反応しない。

と、3Dプリンターが勝手に出力を始める。

恐怖の表情の文香、塊を床に落とす。

震える手で電話をかける文香。

三好の声「もしもし」

文香「すぐに来て！ いいから！」

三好「わかった！ すぐ行く！」

出力は続いている。

× × ×

息を切らせた三好が入ってくる。

三好「大丈夫ですか！？」

隅でうずくまっていた文香、顔を上げ、

文香「（青ざめた顔で）三好君……」

三好「ケガとかは？」

文香「（首を横に振り）大丈夫」

三好「よかった……で、何があったんです？」

文香、3Dプリンターの塊を指差す。

文香「パソコンが勝手に起動したの。それで

何もしてないのにあれが……」

三好、塊を手に取り、じっくりと見る。

三好「昨日の塊とあんまり変わらないみたい

ですけど……」

文香「でも何もしてないのに出てきたのよっ

三好「うーん……」

三好、床に転がっているもうひとつの

塊を見つけ、それを拾う。

塊同士を合わせてみる三好。だが特に

合わさる感触はない。

三好「パズルってわけじゃなさそうですね」

顔を見合わせ少し安堵の表情を浮かべ

る文香と三好。

三好、傍らに塊をふたつ置き、パソコンを操作してみる。

三好「今は正常に作動しますね」

文香「さっきは焦ってたからかな」

三好、一通り操作を試した後、パソコンの電源を切る。

三好「ひとまず落ち着きましょう」

文香「そうね」

文香と三好、テレビをつけて座る。

テレビを見ながらしばらく無言の二人。

三好、ふっと笑みをこぼす。

文香「何よ、急に」

三好「いや。文香さんでも怖いものがあるんだなって思ってた」

文香「あんた私をなんだと思ってるのよ」

三好「……怖いお姉さん」

文香「なにそれ。あのねえ、私だって怖いものは怖い。あんな噂聞いた後にあれが勝手に動き出したらそりゃ怖いでしょ」

三好「でも普段はバカにしてるのになあ」

文香「バカにしてないって。論理的に証明したいだけ」

三好「それがダメなんですよ。論理的に証明できないものもあるんですから」

文香「いいやないね」

三好「あります」

文香「ない」

と、3Dプリンターが再び動き出す。

固まった表情のまま3Dプリンターを

見る文香と三好。

また新たな塊が出力されている。

三好「……論理的な意見を聞かせてください」

文香「そ、それは……ほら、プリンターって

ジョブが残ってたりすると後から動いた

りもするでしょ……うん。きっとそうよ」

新たな塊が出力され、止まる。

文香「……もうビビらないわよ」

文香、新しい塊を手に取り、傍らに置

いてあった塊のひとつと合わせてみる。

文香「……はい、残念」

塊同士はかみ合わない。

文香、もうひとつの塊と合わせてみる。

文香「はい、これも……」

と、文香の手の中でふたつの塊がぴつたりと組み合わさっている。

組み合わさった塊の表面に、手首の静脈が走っているように見える。

文香「キャア！！」

塊を床に落とす文香。

三好「文香さん、落ち着いて！」

三好、呼吸の乱れている文香の両腕を両手で押さえ、落ち着かせる。
散乱した塊を見つめる文香と三好。

○文香のマンション・外観（朝）

朝日が差している。

○文香の部屋・玄関外（朝）

畑中がチャイムを鳴らす。

ドアが開き、寝不足の文香が顔を出す。
畑中「おはようございます。大丈夫ですか？」
文香「うん。朝から呼んでごめん。入って」

中に入る畑中。

○同・内（朝）

ソファでいびきをかいている三好。

文香と畑中が入ってくる。

文香「私は一睡もできなかったわ」

畑中「そりやそうですよね」

畑中、テーブルに置かれた塊を見て、

畑中「これですか？」

文香「うん」

畑中、塊を取って眺めた後、元に戻す。

畑中「3Dプリンター用の樹脂できてます

ね。それは間違いないです。じゃあちよ

っとパソコン調べてみますね」

文香「うん。お願い」

畑中、文香のパソコンを立ち上げて調

べ始める。

文香、ソファにぐったりと腰を降ろす。

畑中「変わったところはありますか。もっ

とも、勝手に3Dプリンターが動いたっ

てことが変わったことではありませんけど」

文香「そう……」

畑中「……どう思います？」

文香「え？」

畑中「昨日の現象に関して」

文香「さあ……たしかにいきなりのことだっ

たからパニックになったけど……でも今
思えば何か人為的なことなんじゃないか
って気もする。ウイルスとか」

畑中「なるほど」

文香「逆に聞くけど、どう思う？」

畑中「そうですね。たしかにそういう人為的
な原因の可能性もあと思っています」

文香「断言しないってことは、心霊現象の可
能性もあるってこと？」

畑中「はい」

文香「ふーん。畑中君って理系なのに非科学
的なことも案外信じるのね」

畑中「理系だからこそですよ。科学なんて所
詮そのほとんどが仮説ですから。なんで

もかんでも科学的にしか考えない人の心の方がよっぽど怖い気がしますね」

文香「そうなのかな」

畑中「まあでも、僕の方でも調べてみますよ」

文香「うん。お願いするわ」

文香、3Dプリンターを見つめる。

○陸橋・上

文香と三好が陸橋を登ってくる。

三好「操作に息詰まったら現場に戻ってやつですね」

文香「ていうかそれしかすることないもの」

三好と文香、QRコードがあったところまでやってくる。

文香、QRコードがあった箇所を調べることが何もない。

文香「おかしいなあ。やっぱりない」

三好「心霊現象だって考えたら別におかしいことじゃないですよ」

文香「インクが雨で流されたとか」

三好「ここ数日、乾燥注意報しか出てません
けど」

文香、答えに窮する。

文香「あ、そうだ」

文香、欄干を登り始める。

文香「この前も一度、こうやってのぞき込んだんだった」

文香、欄干の上から身を乗り出し、下をのぞき込む。

文香「……何もなし」

と、特急電車が真下を通過する。

と同時に、文香の両肩に手がポンっと置かれる。

文香「キヤアッ！」

驚いて降りる文香。

文香「ちよつと、こんなときに悪ノリは……」

怒りながら振り返る文香。

だが、三好は少し離れたところでは
ホをいじっている。

三好、文香の視線に気づき、

三好「あつ、ごめんなさい。ちよつとメールが入ってたんで。何かありました？」

文香「え？ ああ、いやなんでもない」

作り笑いをする文香。

○陸橋近くの民家

文香と三好が主婦Aに聞き込みをしている。

文香「先日ここであつた飛び込み自殺について何か知りませんか？」

主婦A「さあねえ。私も新聞で知っただけで」

三好「変なこと聞きますけど、この辺で幽霊が出たとかいう噂なんかありません？」

主婦Aの顔が陰しくなり、

主婦A「ちよつとやめてよ！ ただでさえこの路線、自殺とか事故とか多いのに。そんな噂立てられちゃ誰も寄りつかなくなっちゃうわ！」

文香「す、すみません」

頭を下げる文香と三好。

○街角

歩いている文香と三好。

文香「いわゆる自殺の名所ってやつか」

三好「心霊スポットとしては鉄板ですよ」

文香「でも手がかりはなし」

三好「想像記事にしますか」

文香「なに言ってるの。それじゃ記事は書け

ても私の周りのことはなんにも解決しな

いじゃない。とにかく調べるわよ」

三好「はあい」

文香「私はあの辺りの過去の事故について調

べてみる。あなたは科学的な検証をして」

三好「え？ どうやって？」

文香「それは自分で考えてよ」

三好「はいはい。何でもやりますよ」

しぶしぶ承諾する三好。

○文香の部屋（夜）

T「数日後」

パソコンに向かう文香、新聞記事デー

データベースで過去の記事を調べている。

画面には自殺などの記事が並んでいる。

文香「……ん？」

文香、ある記事に目が止まる。

『女子中学生が列車に轢かれ死亡』とある。

文香「……昨夜9時頃、近所に住む萩原美代

さんが列車に轢かれ……」

パソコン画面に『萩原美代』の文字。

文香「はぎわらみよ……」

文香、立ち上がり本棚のところへ行く。

本棚の中学の卒業アルバムを開く文香。

文香のクラスの集合写真、ひとりの少

女だけ別枠で写真が記載されている。

その少女の氏名は『萩原美代』とある。

文香「……」

文香のシャツの背中に汗がにじむ。

と、バルコニーの方からガラス戸を擦るような音がする。

一瞬びくくつとする文香。

文香「……キララ？」

辺りを見回す文香。キララの姿はない。
文香「外に出ちゃってたのかな」

文香、バルコニーに向かい、ガラス戸
を開けようとする。

文香「……キャアーツ！！」

ガラス戸の向こうのバルコニーに、長
い髪で顔を覆った女が立ち、ガラス戸
を爪で擦っている。

腰を抜かす文香。

はいつくばるように部屋の隅まで逃げ
ていき、スマホで電話をしようとする
文香。だが、まともに操作ができない。
と、その時また3Dプリンターが動き
だし、塊を形成していく。

文香「！！！」

両手で口を覆い恐怖で声も出ない文香。
と、その時、玄関ドアをノックする音。
さらに恐怖におののく文香。

畑中の声「畑中です！ 開けてください！」

ハッとする文香。

文香、立ち上がり、玄関まで行く。

玄関を開ける文香。

玄関を開けると外に畑中が立っている。

畑中「大丈夫ですか!？」

文香、首を横に振る。

畑中「ちよつと思いだたる節があつて来てみ

たんです。そしたら悲鳴が聞こえて」

文香、泣き出しそうな声で、

文香「バ、バルコニーに、お、女が。そ、そ

れにまたあのプリンターが」

畑中「わかりました。詳しくは後で聞きます。

いったんここを出しましょう」

うなずく文香。

文香と畑中、部屋を出ていく。

3Dプリンターは止まることなく、

次々と塊を出力し続けている。

○畑中の部屋 (夜)

テーブルに座っている文香と畑中。

畑中「そうですか。その女が現れたのと同時にプリンターが」

文香「うん」

畑中「僕のほうは、ネットのある噂が気になつて文香さんのところへ行つたんです」

文香「噂？」

畑中「はい。いわゆる人体パズルに関する新たな書き込みがありました」

文香「そう」

畑中「あの人体パズルは全てのパーツが出そろつてそれが実体化するって話でした」

文香「うん。それは前にも読んだ」

畑中「それです。そのパズルが完成する日つてのが、QRコードがあつた現場で亡くなった人の命日だつて話なんですよ」

文香「でも、あの自殺があつてから一ヶ月も経つてないけど」

畑中、首を横に振り、

畑中「ひとりだけじゃないんです。その現場で複数の人が過去に亡くなつていた場合

は……」

文香「……萩原美代」

畑中「……文香さんも見つけましたか」

文香「うん」

畑中「僕も過去の記事を調べてたんですけど、

同じ名前を見つけました。当時中学生だ

った萩原美代さんがあの近くで亡くなっ

たのが15年前の……今日」

頭を抱える文香。

畑中「どうかしましたか？」

文香「私、その子と同級生だったの」

畑中「え？」

文香「ずっと忘れてた。中学2年の時……」

× × × (フラッシュユ)

夜の線路、踏切に電車が走ってくる。

電車の運転手、踏切に呆然と立ってい

る萩原美代(14)に気づき、ブレー

キをかける。だが間に合わず。

× × ×

座って話している文香と畑中。

畑中「そうだったんですか」

文香「遺書が無かったから自殺なのか事故なのかよくわからなかった」

畑中「……」

文香「でも、今日霊が現れたってことは、萩原さんの霊が関わってるってこと？」

畑中「それはわかりませんが……でも、朝比奈さんの同級生だったんでしょう。何かその、心当たりとかは？」

文香、少し考えてから首を横に振る。

文香「ううん。ない、ないよ。だって今まで忘れてたくらい。その子とは親しくもなかったし。恨みの買いようがないわ」

畑中「そうですか」

文香「うん」

畑中「（ぼそっと）残念です」

文香「え？　なんか言った？」

畑中「いえなにも。それよりビールでも飲みませんか？　そうすりゃ気分も晴れますよ」

文香「うん、そうだね」

畑中、冷蔵庫にビールを取りに行く。

○文香の部屋（夜）

3Dプリンターの周りに、次々と出力された塊が散乱している。

机の上には文香が忘れていったスマホ。スマホに電話がかかってきて鳴り出す。画面には『三好誠也』の文字。

○畑中の部屋（深夜）

灯りが落とされ、暗い室内。

テーブルの上に散乱している大量のビールの空き缶。

ベッドの上、仰向けで布団から顔だけ出した状態で寝息をたてている文香。

文香、寝返りを打とうとするが体が動かない様子。

文香、苦しそうな表情で目を開く。

文香、体に力を入れるが動けない様子。

文香「……！！！」

文香、足下からゆっくりとあの髪の毛の長い女が近づいてくるのに気づく。
恐怖で声が出ない文香。
長い髪の毛の女、文香の上に乗る文香の首をゆっくりと締め始める。

文香「ウウ……」

苦悶する文香の顔色が悪くなっていく。
と、バルコニーの窓ガラスが割れる音。
そして室内に誰かと誰かが争う音が響く。

長い髪の毛の女はいなくなっており、文香は天井を見つめたまま呆然としている。
と、争いが収まり、部屋の灯りが点く。

三好、文香の顔をのぞき込み、

三好「大丈夫か？」

文香「……三好君」

三好、文香の布団をひっぺがす。

文香、手足がビニール紐でベッドにくくりつけられている状態になっている。
三好、はさみで文香の手足の紐を切る。

動けるようになり、起きあがる文香。

文香の目に飛び込んできたのは荒れた室内。そして床にうづくまる畑中の姿。その横に長い髪のカツラが落ちている。

文香「……どういうこと？」

三好「こいつが犯人だったんです」

文香「畑中君が？」

三好「はい。プロバイダに頼んで文香さんのパソコンへの不正アクセスを調べてもらったんです。そしたら畑中のパソコンから遠隔操作をした履歴が見つかった」

文香「それじゃ、3Dプリンターもあの女も

全部畑中君が……」

三好「ええ。人体パズルの噂もこいつの自作自演です。畑中が書き込んだんですよ」

文香「そうだったの」

三好「心配になって電話したんですけどつながらないし、家にも行きましたけど留守だったんで、もしかしてと思って」

文香「そう。ありがとう」

三好「でもこいつ、なんでこんな手の込んだこと……」

畑中、苦しそうに顔を上げ、

畑中「萩原さんの恨みをはらすためだ……」

文香「え？ あなた萩原さんとどういう……」

畑中「やっぱり覚えてないんだな。僕も同じ

中学校だったんだよ。あんたと」

文香「あなたが……でも、だからってなんで

私を殺そうとしたのよ」

畑中「新聞だよ」

文香「新聞？」

畑中「新聞部の部長だったあんたが書いた校

内新聞さ」

文香「それがどうしたって言うの」

× × × (フラッシュ)

中学校の廊下。

校内新聞を貼っている文香(14)。

新聞には「万引きは犯罪です！」と大

きく書かれている。

新聞の周りを生徒たちが囲んでいる。

畑中 N 「あんた、学校の購買部で頻発してた
万引きのこと記事にして書いたろ」

文香 N 「そうだったかな。昔のことだから」

畑中 N 「万引きはいけない、それだけならよ
かった。でもあんたは犯人捜しを始めた
んだ。犯人が女子生徒らしいこと、昼休
みに犯行が多いこと。そしてとうとう犯
人が落としていった物証まで載せた」

× × ×

畑中と対峙する文香。

文香 「だからって、そんな昔の万引きのこと
と今回のことと何の関係があるのよ」

畑中 「……犯人は萩原さんだったんだ」

文香 「……はあ！？ だから彼女が追い詰め
られて自殺したって言うの！？ じゃあ
悪いのは彼女じゃない！ なんで万引き
してる奴に恨まれないといけないの！？
とんだばっちりよ！」

畑中 「……させられてたんだ。萩原さんは」

文香 「え？」

× × × (フラッシュ)

昼休みの賑わう購買部。

その中にいる美代、隙を見て商品を鞆に入れる。

その美代の様子を遠巻きからニヤニヤ見ている不良っぽい少女たち。

畑中 N 「萩原さんはあるグループからいじめられてた。それでいつも万引きするよう強要されてたんだ」

× × ×

うつむく文香。

文香「……」

畑中 「もし万引きがバレてもいじめてた奴らはしらを切るだろう。それで萩原さんひとりだけが追い詰められていったんだ……
…僕はいつも彼女のこと気にしてたから……気づいてたんだ」

三好 「でもなんで今さら文香さんにこんなことしたんだ」

畑中 「僕だってもう昔のことと思って記憶の

奥底に封印してたよ。でもあの飲み会で
久しぶりにこの女にあったとき……」

× × × (フラッシュユ)

居酒屋の座敷テーブルに座っている文
香、麻衣、畑中。

文香「そーいや今日の取材さあ。飛び込み自
殺の現場だったんだよ。高丸駅近くの陸
橋からドーンって」

麻衣「ええ。怖い」

文香「そお？ 生きてる人間取材するほうが
よっぽど怖いけど。まあでも自殺なんて
死んだ本人が悪いんだからさあ。いちい
ち取材なんてしなくていいと思うけどね。
ほんと迷惑かけないでって感じ」

文香の顔をじっと見ている畑中。

× × ×

畑中「同じ現場だったのに……あなたは萩原
さんのことなんて全く覚えてなかった。
それどころか……おまえに……おまえに
何の権利があるってんだ！」

畑中、泣き崩れる。

文香「……」

近づいてくるパトカーのサイレン。

○陸橋・上

花束を手向け、手を合わせている文香

と三好。

文香と三好、歩き出す。

文香「私、記者辞めるわ」

三好「どうしてです？」

文香「だって、人をひとり自殺に追い込んだ

んだよ」

三好「でもそれは中学校のときのことでしょ」

文香「……それでも、同じことを仕事にして

生きていくなんて」

三好「……だったら今度は、ひとりの人の命

を救えるような、そんな記事を書くべき

でしょう。これから」

文香「……そんなことしたって」

三好「できることしか……できないんですよ。」

みんな」

文香「……できることをするしかないか」

三好「そうですね。でもまあそのためには、

さっさとこの出向終わらせないとね」

文香「……ありがとう」

歩いていく文香と三好。

○文香の部屋（夕）

文香、散らかった部屋を掃除している。

半透明のゴミ袋にたくさんの塊を入れ、

隅に置く文香。

文香、自分の食事をテーブルに並べ、

猫のエサを入れた皿を床に置く。

文香「キララー。ご飯の時間よー」

辺りにキララの姿はない。

文香「おっかしいな」

キララを探す文香。

と、ベッドの下から噛み後のある塊が

コロコロと出てくる。

文香「ん？」

文香、ベッドの下をのぞき込む。

と、ベッドの下にはたくさんの塊があり、キララがそれで遊んでいる。

文香、キララと塊をベッド下から出し、

文香「あんたけっこう集めてたねえ。まだこんなにあっただ」

塊を拾う文香。

文香、塊を見るとどれも噛み後だらけ。

文香「あれ？ さっき集めたやつには全然噛み後なんてなかったのに」

ふとゴミ袋を見る文香。

キララ、塊に飽きてエサの方へ行く。

と、スマホに『三好誠也』の着信。

電話に出る文香。

文香「もしもし」

三好の声「文香さん！ 大丈夫ですか？」

文香「え？ 何が？」

三好の声「文香さん。警察から何も聞いてないですか。畑中の供述こと」

文香「いやまだ何も」

三好の声「冷静に聞いてくださいよ」

文香「またまた。何？」

三好の声「畑中はたしかに文香さんのパソコンを遠隔操作していました。でもそれはパソコンに電源が入っているときだけしかできないらしいんです」

文香「……え？」

× × × (フラッシュ)

文香と三好が勝手に動く3Dプリンターをじっと見ている。

背後のパソコンの電源は切れたまま。

× × ×

三好の声「それに畑中はQRコードについても自分は知らないとも言ってるんです」

文香「……どういうこと？」

三好の声「推察ですが……二種類あったんじゃないでしょうか。パズルは。畑中が作ったものと……そうではないものと」

何かを見つめる文香の顔、どんどん血の気が引いていく。

文香の視線の先、ゴミ袋から人の手が這い出ようとしている。それはもう樹脂ではなく、はつきりとした死者の手である。

文香「キャアアー！！」

文香、全力で部屋を飛び出していく。

○文香のマンション（夕）

辺りはかなり薄暗くなっている。

非常階段を駆け下りてくる文香。

文香、平面駐車場に止めてある自分の

自動車に乗り込む。

エンジンをかける文香。

と、助手席側の窓を叩く音。

ビクツとなる文香。

だが、窓の外にいたのは三好。

ウインドウを降ろす文香。

文香「あ、あれが実体化したの！ 今度こそ

殺されるわ！」

三好「とにかく逃げましょう。さあ早く」

三好、助手席に乗り込む。

自動車、急発進で出ていく。

○自動車・内（夜）

線路沿いの道を走る文香の自動車。

文香「どうしよう。どうしたらいいの」

三好「俺の知ってる霊媒師のところへ行きま
しょう。なんとかかしてくれるかもしれな
い。そこを左に」

自動車、踏切に入っていく。

文香、ふとバックミラーを見ると、美

代の霊が後部座席に乗っている。

文香「キヤー！！」

文香、驚いて踏切の中で車を止める。

三好「どうしたんですか！？」

文香「う、後ろに……」

三好、後ろを振り返るが何もない。

三好「何もないですよ」

文香「え？」

文香も振り返るが何もない。

三好「とにかく急ぎましょう」

文香、発進しようとするがタイヤが空回りして自動車が動かない。

文香「何よ。どうなってるのよ！」

警報機が鳴り遮断機が降りてくる。

文香、発進をあきらめ、ドアを開けて出ようとするがドアが開かない。

遠くから近づいてくる特急電車。

文香、力一杯ドアを押すが開かない。

文香、ふと正面を見る。

文香の視線の先、反対側で踏み切り待ちをしている自動車の運転席に三好の姿がある。

文香「え……？」

三好、必死に文香に何か叫んでいる。

文香、恐る恐る左のほうを見る。

助手席にいた三好の姿が、美代の霊に変わっている。

美代の顔、文香に向き、ニツと笑う。

文香「キヤアアアアー！！」

文香、もう一度、力一杯ドアを開けると、今度はドアが簡単に開き、勢いで外に転がり出る文香。

文香、起き上がると特急電車が目の前にあった。

文香の悲鳴が衝突音にかき消される。

○踏切 (夜)

レポーターが中継している。

レポーター「ここが先ほど事故があった現場です。死亡したのは会社員の朝比奈文香さんとみられ、電車と自動車の間に挟まれ即死だったようです。電車の運転手の話によると衝突直前まで自動車に気づかなかったということ、真相の究明が急がれます。なお……」

中継をしているレポーターの足元、踏切横のガードレールにはQRコードが現れている。

(終わり)